

(抜刷 新潟外科同窓会誌第十七号)

中田瑞穂先生を偲ぶ集い・生誕百年

生田房弘

中田瑞穂先生を偲ぶ集い・生誕百年

生 田 房 弘



写真1：中田瑞穂先生（55歳）
昭和23（1948）年5月29日（土）、大学の運動会にて。

を継がれ、今は亡い植木幸明先生が植えられた杏の木に並べて建立し、
とめの奥様に除幕して戴いた。

次いで、この日と翌28日（日）の2日間、先生の遺品と作品およそ50
点での偲ぶ展をイタリア軒画廊で開催した。

そして同じ27日、二百名近い人々がとめの奥様と御遺族を囲み、和や
かにありし日の先生の御講演のテープを耳にし、その姿を見、心温まる
感動のひとつときを共にした。

歴史を越える巨大な先生と、その先生をめぐる記念行事について書き
残すなどということは、先生の弟子の最末席の筆者などに、到底なせる
任でないことはよくよく承知している。しかしおそらくこの度の行事の
発起人会の事務局を務めたことなどから、本誌編集委員会のたつての御
指名となったものとお許しを願う他ない。

全国的にも、生誕百年祭が行われるということは極めて稀なことと耳
にする。たしかに、時は思わぬ間に過ぎ、既に昭和30年以降御卒業の多
くの同窓会々員の方々は、すべて先生の直接の教えには接しておられな
い時代となっている。このことを思い、分を忘れて、我々の共通の師「中
田瑞穂先生」に一言ふれさせて戴きたい。

中田瑞穂先生については、すでにこの「新潟外科同窓会誌」創刊号、
昭和51年（1976）年が中田先生の追悼号であること。そして筆者も先生
の生涯についてはやや詳しく今年発行のBrain Medical 4(2)..
240-246・1992に纏めさせて戴いてあるので、是非それらを御参照戴
ければ幸いである。

中田瑞穂先生の御生涯

先生は島根県津和野にて明治26年（1893）年4月24日出生になられた。
大正6年（1911）年12月東京帝国大学医科大学を卒業され、直ちに外科
教室に入局され、4年を過ごされた。

そして、まだ上越線のなかつた大正11年（1922）年2月、上野駅を出
発し、碓氷峠を越え、長野を経由する信越線の夜行列車で新潟市に到着

今年、中田瑞穂先生の数えての生誕百年にあたる。

先生らしくささやかに、静かに先生を偲びたいという二百名ほどの人
々とその心が、本年平成4年（1992）年6月27日（土）まづ、

「学問の静かに雪の降るは好き」

を刻んだ小さな句碑を新潟大学脳研究所の中庭の、中田先生の一方の志

なかた・みづほ先生（1893～1975）

先生の過ごされた日々

明治26(1893)年4月24日	島根県津和野にて出生
大正6(1917)年12月	東京帝国大学医科大学卒業
大正7(1918)年1月	同大学近藤外科に入局、以後4年間勤務
大正11(1922)年4月(29歳)	新潟医科大学助教授、同医学専門部教授
大正13(1924)年12月	ドイツ(ハイデルベルク、E. Enderlen先生など)など 欧州各国と、アメリカ合衆国に外科学研究のため出張 帰国
昭和2(1927)年5月	新潟医科大学教授
昭和2(1927)年6月(34歳)	妻子夫人急逝
昭和9(1934)年(41歳)	アメリカ合衆国(脳神経外科医 H. Cushing, W. E. Dandy先生など)とヨーロッパに出張
昭和11(1936)年5月(43歳)	帰国
昭和11(1936)年11月	(日中戦争始まる)
昭和12(1937)年(44歳)	「あたためよ越後の酒もわろからず」
昭和13(1938)年(45歳)	(太平洋戦争に突入)
昭和16(1941)年(48歳)	(終戦)
昭和20(1945)年8月(52歳)	
昭和22(1947)年(54歳)	「脳手術」南山堂第1版出版
昭和22(1947)年	「学問の静かに雪の降るは好き」
昭和23(1948)年5月(55歳)	第48回日本外科学会会長/新潟 第1回脳外科研究会(後の日本脳神経外科学会)新潟 で主催
昭和24(1949)年(56歳)	「脳腫瘍」南山堂第1版出版
昭和26(1951)年(58歳)	第13回日本医学会総会特別講演「日本における脳外科 の現況」
昭和27(1952)年4月	(新潟医科大学が新潟大学医学部と変わる)
昭和28(1953)年4月(60歳)	還暦。句集「刈上」を出版 ワーレンベルグ症候群の発作
昭和30(1955)年の頃	大脳半球剝除術を行う
昭和31(1956)年4月(63歳)	新潟大学医学部教授を定年退官 同年同月(新潟大学脳研究室室長)、新潟大学名誉教 授
昭和32(1957)年4月(64歳)	新潟大学医学部附属脳外科研究施設長
昭和33(1958)年10月(65歳)	「外科今昔」文光堂を出版
同年11月	紫綬褒賞
昭和34(1959)年3月(65歳)	退職
昭和41(1966)年9月(73歳)	「癲癇2000年」を連載(後に1984年、日本てんかん協 会より単行本として発行される)
昭和42(1967)年11月(74歳)	文化功労者
昭和43(1968)年11月(75歳)	日本学士院会員
昭和46(1971)年2月(77歳)	「脳のPlasticityなど」「脳と心」講演
同年10月(78歳)	Neuro-Gliologyを書く
昭和50(1975)年8月18日(82歳)	新潟市西大畑町5207にて逝去

された。それは28歳の時であり、新潟医科大学（後の新潟大学医学部）外科教室の助教授、兼附属医学専門部教授として4月に着任するためであった。

その着任の2年後の大正13(1924)年12月から2年余、ヨーロッパ各国、アメリカ合衆国に出張されたが、この時の目的は外科学の研究であった。その途上、ドイツのハイデルベルク大学のエンデルレン先生(Endleren)の静かな着実な手術を見学され、深い感動の中で思わずよまれたという有名な句に、

「刻々と手術は進む深雪かな」

というのがある。33歳の時であった。

2年半後の昭和2(1927)年5月帰国。翌月(34歳)新潟医科大学教授に就任。以来文字通り外科学教室を主宰されることとなった。これ以後先生の研究は主に腹部腫瘍、いわゆる外科学の研究に没頭されている。

しかし昭和10年に近づく頃、先生の胸中には徐々に脳の手術に対する思いが沸きはじめたように見受けられる。ところが、昭和9(1934)年妻子夫人が他界されるという御不幸に遭遇されている。その2年後の昭和11(1936)年5月(43歳)、先生は第2回のアメリカ合衆国、ヨーロッパの旅に出発された。この旅は明らかに脳神経外科に焦点が絞られている。米国ではニューヘブンのイェール大学におられた脳神経外科の開拓者クッシング(Harvey Cushing)やボルチモアのダンディ(Walter E. Dandy)先生らの理にかなった静かな手術に感激されている。後に中田先生は自著「外科今昔」(昭和33年)の中で、エンデルレン先生とクッシング先生について「私は脳外科手術というものはかくあるべきという根本を教えられたような気がする」と述べておられる。

昭和12(1937)年から日本は日中戦争、そしてまた昭和16(1941)年から太平洋戦争に突入していったが、昭和13(1938)年(45歳)に有名な、

「あたたためよ越後の酒もわるからず」

の句がつくられている。また、現在も活発な「新潟脳神経研究会」の前身である「新潟神経学研究会」を作られ、和気あいあいと脳に興味をもつ平澤興先生その他の教授達と話し合いを始められたのもこの昭和13年からであった。

学問には常に「和」、「輪」が大切と言われているが、故郷を新潟にもつ脳解剖学の平澤興先生が新潟大学に着任されたのは中田先生が着任されたわずか3年後のことであり、以来常に先生の良き学問の友であったという。そしてまた昭和14(1939)年には先生が強く尊敬されていたクッシング先生が死去されている。またその年に、中田先生の全ての脳腫瘍例を病理学的に検索されることになる病理学教室の伊藤辰治教授がニューヨークのペレビュー病院に留学され、脳腫瘍の病理学を以て輪を一つ拡げておられる。

ともあれ、太平洋戦争の極めて厳しい中でほぼ10年の研鑽の結晶として、終戦後の昭和22(1947)年「脳手術」が南山堂より出版された。また、

「学問の静かに雪の降るは好き」

が作られたのもこの年で、先生は54歳であられた。

翌昭和23(1948)年5月の1日、2日、3日の3日間、第48回日本外科学会総会が先生を会長として新潟で開催された。第3日目の会長演説は、日本の脳腫瘍の特性についての講演で、その中で先生は松果体腫(その多くは今日のgerminomaの筈)などが日本に特異的に多いことを既に指摘されている。

その翌日、先生はさらに第1回脳外科研究会(後の日本脳神経外科学会)をあの木造の第1講堂で開催されている。

さらに翌昭和24(1949)年(56歳)には、日本における最初の脳外科

専門書であった「脳腫瘍」が同じ南山堂から出版されている。日本全国の脳外科を目指す医師はこれらの書によって先導され、学ぶこととなった。また脳外科を目指す新進の学徒はほぼ例外なく新潟で先生の手術を見、先生の教えを乞うに至ったという。

振り返ると、昭和22年から昭和24年の頃は、特に新潟で築かれた学問が次々に全国に発信され続けた年代と考えられてくる。このようにして全国の大学に順次脳外科が生まれていったが、後年「脳と心」で先生自身が述べておられるように、先生は決して脳神経外科学だけに心を注いでおられたのではなく、もっと広い視点での脳研究、巾の広い神経学を考えられておられ、今日の日本の臨床神経学発展の力強い原動力であったことも疑いない。

昭和28(1953)年4月23日は先生が満60歳の還暦を迎えられた誕生日であった。これを記念し、句集「刈上」を世に送られた。ところがその6日後、即ち4月30日午前2時頃、先生は突然ワレンベルグ症候群の発作にみまわれた。その際の病歴と病状などは新潟医誌67(9):797、1953に詳細に報告された。これは後年豊倉康夫先生など臨床神経学者から「未だかつて前例のない記録」と言われた記録である。

この昭和28年に医学部に外科学第2講座が開設されている。これは実質的に脳神経外科学教室の誕生であった。なぜなら先生はそれまでの第1外科学講座を堺教授に譲られ、自らは新設の第2講座に移られ脳外科に専念されたのであった。

そして昭和31(1956)年4月63歳で定年退官され、新潟大学名誉教授となられた。この時、先生の御退官を惜しみ、かつそれを記念して伊藤辰治医学部長などの御尽力で旧奉安殿に木造の2階を上げ、生理、形態、化学の各研究室を内々に作った。すなわち小さな自称脳研究室を作り、「新潟大学脳研究室」の名を冠し先生が室長となられた。この時の記念講演会で京都大学の荒木千里教授は Klein aber Mein というエールリッヒの言葉を中田先生に捧げ、「今は小さいけれど、将来大きな、立派な、そして日本の誇るべき脳研究所に発展することを祈ってやまない」と結

ばれた。これが早速、翌昭和32(1957)年4月には「新潟大学医学部脳外科研究施設」と文部省から認可され、それが更に昭和42(1967)年、「新潟大学脳研究所」として独立し、今日の脳研究所に至っている。即ち、新潟大学脳研究所もまた中田先生の残されたもの一つである。

このように、先生は極めて広い視点で神経学を見つめておられ、新潟という静かな地で静かな学問を続けられ、決して自ら表に立とうとはされなかったが、その言動は全国的に強い影響を及ぼした。まさに歴史的に日本の脳研究の源流のひとつであり、優れたことには疑いはない。

先生はまた、先にも述べたように、優れた神経学者であると同時に、優れた俳人でもあられた。還暦のしるべに句集「刈上」を発行された。これは先生の名が稲そのものであることから名付けられたもので、この日以来、先生は御自身の名を「稽翁」と書かれるようになった。稽は稲を刈った後、再び伸びてくる細い緑の芽のことである。しかし新潟ではすぐ雪が降り、たとえわずかなもみがついても決して実を結ばないことからである。御退官後の活発な活動を見ると誠に頭の下がる思いがする。第2外科教室は昭和32(1957)年に植木幸明教授に譲られた。その後、植木教授は昭和37(1962)年脳神経外科学部門が脳研究施設に作られた際、第2外科からそちらに移籍されることとなった。そして第2外科は胸部外科に生まれ変わっていった。

御退官後の先生はむしろそれまで以上に、あらゆる雑誌に目を通され、読破されていた。例えば、昭和46(1971)年の脳のシンポジウムで「脳の plasticity」と題して講演されたことに前後して、「脳と心」について三度、長編の論文をまとめておられる。また同年、先生は「Neuro-Giology」という短い文を新潟医誌に発表されている。真に Neurology を理解するには neuron を支えている筈の glia cell との関係こそ今後研究しなければ、真の Neurology は理解できない、という主旨である。ここ数年の急速な glia 細胞研究の進展の中で、今日発表されても人々は何ら違和感をもたないであろう、当時すでに20年の先をよんでおられたと言つてよい。

先生はまた、驚くほどの真実の迫力をもって迫る絵を残しておられる。晩年にまとめられた自撰の絵はまさに息を呑むばかりの作といつてよいが、筆者にそれを表現する力がない。

ただひとつ、それは先生が亡くなられる前年の昭和49年9月25日の朝であった。先生が私に言われた言葉がある。「私の絵は忠実な写生ではない。でも、科学も実は自分が真実だと思ふ姿を忠実に写生して人に見てもらふものであることを忘れないように。」と。私はその言葉を自分の立つ礎と心してきた。



写真2：中田瑞穂先生（78歳）
昭和46（1971）年5月、かき正にて近藤駿四郎先生、植木幸明先生と。

偲ぶ集い・生誕百年

この度の事業は外科学教室、脳神経外科学部門をふくむ脳研究所各部門、俳句の会の人々に限って行なうこととし、相馬雄三、村上富吉、大溪一夫、鳥居俊夫、岡村 茂、杉山義昭、武藤輝一、生田房弘、江口昭

治、岩淵 眞、田中隆一、そして蒲原 宏、桜井浩治、山内春夫（敬称略）が発起人となり会を重ねつつ立案し呼びかけた。実に二百名近い人々の賛同を得た。

1. 句碑建立

文字は全員が「学問の静かに雪の降るは好き」に賛同し、その書体は先生がかつて茂野録良先生（元新潟大学長）が教授に就任された際に祝いとして差し上げられた軸を複製させて戴いた。

句碑は新潟市の石六石材店、倉田六治氏に依頼した。同氏の優れた技術と献身的な御協力によって完成しえたものである。その石には輝石安山岩（鞍馬石）が使用された。除幕式は午後4時30分から、とめの奥様初め御遺族、そして賛同された百余名と学生の顔も見えた。式は安田八幡宮宮司安田みつとし氏により行われたが、まず発起人を代表して岡村茂先生が御挨拶をされ、神事の中でとめの奥様により除幕された（写真3）。所は脳研究所中庭である。

2. 偲ぶ展

中田瑞穂先生の作品や遺品など約50点は全て多くの方々のお厚意によってよせられたもので、イタリア軒画廊で行われた。そして27日（土）、28日（日）と2日間に亘ったこの偲ぶ展は、BSN新潟放送会長の梁取清助氏の献身的な御援助によって初めて可能となったものであった。

3. 偲ぶ集い

イタリア軒での偲ぶ集いは、全員がまず記念撮影の後、当日やむなく出席できなかった20名を別に、百七十四名が参会した。司会は脳神経外科同窓会会長杉山義昭先生によって進められた。まず武藤輝一新潟大学長による発起人挨拶。ついで、昭和46年の「脳の *hastiness*」と題された脳シンポジウムでの先生の講演がテープ（杉山先生）で流され、黙禱が行われた。

続いて御来賓の豊倉康夫先生の挨拶があったが、そこで中田瑞穂先生の生まれられた1893年は、神経学の祖シャルコー(J.-M. Charcot)先生が亡くなられた年である、とのことばに皆深い感動を呼び起こさせられ

た。続いて萬年 甫先生はすでに小学生の頃から父母の故郷鶴岡において新潟に中田瑞穂先生ありとその名を知ったことなどが語られた（これは新潟医学会雑誌に印刷中）。

ここで、中田とめの奥様、紳一郎氏の御挨拶の後、脳神経外科学は田中隆一先生、まはぎは遠藤喜久夫先生、脳研究所は生田が夫々代表して発言。ついで門下生代表相馬雄三先生の発声で献杯され、歓談、会食のあと、先生の生前のスライドや句会における中田先生のビデオ等が映写され、最後に極めて和気あいあいの中で、外科同窓会会長鳥居俊夫先生が発起人を代表して御礼を述べられ、皆深い感動をひとつにすることができた。



写真3：中田先生の句碑
平成4(1992)年6月27日、先生を偲ぶ集い・
生誕百年の賛同者が建立。脳研究所中庭。

生誕百年に思うこと

ここに掲載させて戴いた写真1、2は中田とめの奥様から原写真をお借りして載せることの出来たものであるが、筆者はここで特に写真1に焦点をあて先生を偲んでみたい。

先生の数ある写真の中で、極めて躍動感溢れる、充実した、まさに晴朗の語にふさわしい感がこの先生の御顔から溢れてくるように思うのは私だけであろうか。

その写真には「昭和23(1948)年5月、運動会」とだけ御自身によって書き込まれている。昭和23年5月、といえばこれは大変な月であることに気づく。それは先生御自身が会長として第48回日本外科学会を新潟で開催された月そのものでもある。ところが、その同じ5月の運動会というの、この頃の教授会議事録を調べてみるとそれは5月29日(土)に開かれている。この写真は5月29日のものである。他方、第48回日本外科学会は5月1、2、3日に開催されており、それは土、日、月に該当していた。従って、この翌日に開かれたという第1回日本脳神経外科学会が開催されたのは昭和23年5月4日でそれは第1火曜日であったことがわかる。

即ち、先生はこの写真の撮られた前年の昭和22年(54歳)に、日本で初めての「脳手術」専門書の第1版を南山堂から出版され、「学問の静かに雪の降るは好き」を発表されている。そしてこの昭和23年5月29日の運動会のほぼ1ヵ月前には日本外科学会を主催し、会長演説もすまされ、それらもすべて無事成功裏に終わっていた。さらにこの翌年出版される「脳腫瘍」の草稿もすでに書き進んでおられたに違いない。先生のこの顔の横溢するエネルギーと充実感がわかる様に思われる。

中田先生という先生は学べば学ぶほど凄まじいほどの幅と質と深さをもっておられたことに気づく。このような先生をおそらくどなたが記述されても人々は決して満足などされないであろう。当然と思われる。

しかしこうした中田先生の人間味あふれる一面について、しかもこの写真1の昭和22〜23年当時の先生を知るのにまたとない貴重な記録、まさに中田先生を忠実に「写生」したような記録、が残されている。それはこの新潟外科同窓会誌創刊号、昭和51年に書き留められた今はない鶴岡の太田秋郎先生の「二冊のノート」と題された中田先生を偲ぶ追悼文である。ここにあってそのほぼ全文を再掲させて戴き、中田先生と共に

先生を偲ばせて戴くことをお許し願いたい。いつか時代は移り社会的背景も、治療法も異なる点のあることから、今はいささかその背景を読み直す必要もあらうとは思われるが……。すなわち太田秋郎先生の文は、

『二冊の古いノートが私の手許にある。昭和二十二年春から、中田先生の外科総論を、次いで臨床講義を受講した時のノートである。』

卒業後二十五年、学生時代のノートはその殆どを失ってしまったが、この二冊のノートだけは常に身辺から離さなかった。いま、頁を繰って行くと、教壇に立たれた当時の先生の御姿や御声、黒板に書かれた文字や図までがまことに懐かしくありありと想い出される。

先生は講義の中で時々ユーモラスな表現をなさって我々学生を魅了された。私はこれらもすべてノートに書き込んでおいた。先生に関するこのような記録は恐らく他に絶無であろうと思われるので、その幾つかをノートから抜萃して見ることにする。

頭蓋骨折「頭蓋骨がすこしぐらいイビツになっても帽子をかぶれば分らぬ。それより中の方が大切だ。……脱臼の整復「威勢よくガラガラッと戸を開けて帰って来る人も居れば、そろっと忍び込んで誰も気づかぬ間に寝ている人もある。」「外れた顎をはめてやると、お辞儀をして有難うのアを言うとまた外れてしまう人がある。……リンパ腺炎「子供は頸に、女は腋窩に、そして男は鼠径部に出来易い。男の場合足先の傷から直ちに鼠径部に来るとは考えられない。」

関節炎「お嫁に行つてゴノをうつさされ、関節の強直を起こして離縁された話が新潟にある。……結核「治療にはゴールドが第一だ。オサツでも結構。……肉腫「手もつけられぬ肉腫に照射療法を行い腫瘍を小さくして安心させてやるのも医者者の術である。」 診察法「消化器疾患の診察の際には直腸指診を決して忘れてはならぬ。If you do not put your finger in, you shall put your feet in it。」

表紙の角は丸くなり、インクの色も鮮やかさを失ってしまったが、この二冊の古いノートは、私が中田先生の存在を知り、先生の講義にひか

れて学生時代に既に外科を志し、卒業後ためらう事なく先生に師事する動機となった、私にとつてはかけがえのない宝である。」と。

合掌。